
魔眼をもつ兄妹

七夕 赤裳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔眼をもつ兄妹

【Nコード】

N3320B

【作者名】

七夕 赤裳

【あらすじ】

ある魔眼を持つ双子の兄妹とある便利屋が会うのは必然だった。こいつらが出会った時奇跡が起こる！（たぶん…）

始まりは大雨（前書き）

初めて投稿します。

誤字などや意味のわからない言葉がありましたら教えてください。

始まりは大雨

近年中国は目まぐるしい発展を遂げた。

そこで、自分たちの技術力を誇示しようと日本と協同で中国と日本の間に巨大な橋を架け、その中央に人工島を作った。

しかし、橋も島も出来た時に問題が起きた。

そのせいで工場は途中で中断され、結局島は荒れ、九龍城さながらの無法都市になってしまった。

家をなくした者、追放された者、そこにいられなくなった者などさまざま人間が名も無い島に集まるようになった。

そして時がたち、ある男がこの島を訪れた時この物語が始まる。

今日のこの島の：いや、この橋といったほうがいいか。とにかく天気は最悪のようだ。

かなり強い雨が降っていて前がまともに見えないほどだ。

そんな中黒いフードを被った男が、あの人工島を目指し橋の上をひたすら歩いていた。

普通に考えたらこの男はバカだ。

なぜなら、この橋はとてつもなく長い、約200kmもある。

だいたいのは車か船を使ってあの島を目指す。

なのにも関わらずこの男は歩く。この大雨の中をひたすら歩く。

ここは島の中にあるただひとつの喫茶店「デビルアイズ」の中、きちんと掃除された店の中は、ここが無法都市にはまるで見えない。

そこでカウンターを雑巾で拭いている少年がいる。

まだ十四か十五歳ぐらいにしか見えない少年は、黒髪でかわいい顔立ちをしている。

ただ右目だけ眼帯をしている。

それが、あまりにもその少年にはミスマッチだ。

彼が動き止めつぶやいた。

「もう少しで彼が来る…」

そうつぶやいた。

始まりは大雨（後書き）

ご意見・感想などをどうか教えてください。
七夕 赤装より

誘い

黒いフードを被った男は、三日間歩き続けた。

そしてやっと着いた。

彼の格好は黒いローブをきている。だが、大雨の中を歩いてきたせいでボロボロだ。

それでも彼はフードをとらなかつた。彼の身長は185cmぐらいで背が高い、だからフードをとらない彼の姿少し不気味だった。

島に入るためには門を通る必要がある。その門には世界各国の言語で『ようこそ！夢の島へ！』と書かれていた。

「何が『夢の島』だ。ただの廃墟だろ。まあ住めば都って言葉もあるし」

軽く愚痴りながらとりあえず、島の中心に向かう事にした。

島の中心についた時には、太陽は南中していた。

そこは中央に水が出ていない噴水があるところだ。

そこには何人かの人たちがいた。

ベンチで寝ている者、鳥にエサをやっている者、たわい無い話をしている者など皆ゆつたりとしていた。どうやらここは、この島の住民にとっては憩いの場になっているようだ。（意外だ：無法都市と聞いていたからもっと混沌としているのかと思った）

想像していた島の現状と現実の島の現状にギャップを感じているときに、後ろから赤いニット帽を被った男に声を掛けられた。

「よお、そこのにいちちゃん、あんたこの島初めてだろ？」

振り返ってみると三十代そこの男がいた。

彼は男の質問に答えずに黙って男を睨んでいた。

男はそんな彼の態度にイラついたようだ。

「おい！人が話しかけているのに黙ってんじゃねえ！」

怖い顔をして怒鳴ってきたが、彼は特に臆^{おく}することなく黙ったまま男を睨んでいた。

「あんた……まさかしやべれないのか？そうか、そうか、それはすまなかった、あなたがしやべれないとは知らなかったからつい怒鳴ってしまった」

いきなり男がわけの分からない事を言い出した。しかも一人で勝手に納得して、謝ってきた。

どうやらそんなに悪い奴ではなさそうだ。

「まあしやべれない奴は他にもいっぱいいるから気にするな！とりあえず俺の話を聞いてくれよ」

少し間を置いてしやべりだした。

「実はなあ、あんたに俺らの『チーム』に入って欲しいだよ。まあぶっちゃけ俺らのパシリだけど、悪い話じゃない。俺らの『シンボル』を付けてるだけで他の奴らには襲われないし。俺らの『テリトリー』内だったら、半額で日用品から銃まで、さらには不思議な世界に逝けるクスリまで買える。どうだ、いい話だろ？」

確かにかなりおいしい話だ。

本土の方だと法律が厳しくなり、銃やクスリはなかなか手に入れる

ことが出来なくなっているからだ。

「入るんだったら頷いてくれよ」

彼は男の話を聞いてため息をついた。

「まず、俺はしゃべれる。ただ初対面なのに名乗りもしない猿とは話はしないことにしている」

「なんだよ！しゃべれるのかよ！全く心配して損した。まあ名乗らなかつた俺も悪いか。そうだな……よし！まずは自己紹介だ。俺の名前は袁紹^{えんしょう}だ。一応中国人だ。で、あんたの名前は？」

馬鹿にされたのに全く気にせず話を続ける燕紹、それとも気付いてないだけかもしれない……

彼は今まで取ることのなかつたフードを取った。

まず目に入つたのは、スカイブルーの美しい長髪だ。

その色は見る者全てに美しい海を連想させるほど、美しかった。

「綺麗な色だな、あんたの髪」

袁紹は思わず呟いた。

「俺の名前は大神牙^{おおかみ}だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3320b/>

魔眼をもつ兄妹

2010年10月10日19時05分発行